

流行歌

074429-000-8

特53-612

流行歌

三木直入堂

M27

CEI-1681





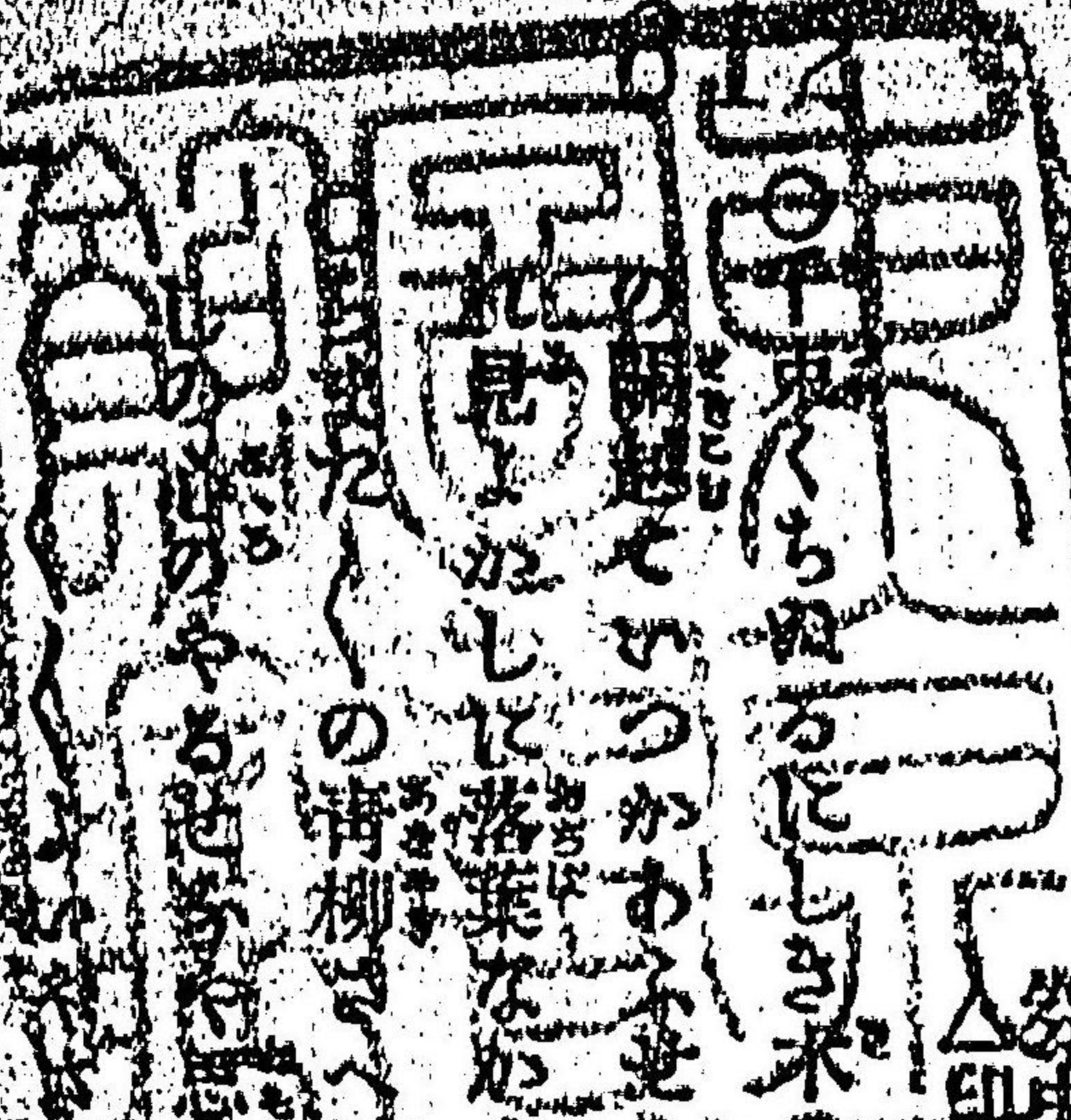


○新撰葉唄集

券中 ○印ハ本調子印ハ上リ  
ハ三下リナリ



特 53



の雨越そいつかあふをまつしすのまつはつれあやこ  
の思ひよしづむ戀の淵底しら川  
の青柳さへも合あれ春風がふくわいなわた  
の落葉なからも女夫づれ  
のやうせむかかたあしらせたや 合よい

○らんまじしいが合よふさか 合しやんせぐらになるのも



○音をまへしからしやんすなむしじやどて何の合くいな  
二 びたらしはさし

○じば玉のやみどおまへにのほりつめ合二階せかれてし  
のびあふ夜は夢さへ合くろぬりの枕ことばじやないか  
いな

□ぬしと二人で店借て世たいをもてばなべかまどとうこ  
やくせんまで買そろへ合それでありすはすりばちすり  
て木せつかいみとこし組板はう丁どいふるら合として  
いつお出であんすへ

□玉手さんへはわしや月終りむりなねがひぎくめんめ  
て舞のしはらく八百やあ七舞終ぐわしに鳥をしまさふ  
ちとだして

□親のゆづりの五本のゆびを四本半あたらがしたはん  
にお前とらみな人

○かねて手くたどわしやしりながら合くどさ上手につら  
のりやすくたまされて咲室の梅

○榎根うの花ほどゝぎす一ト舞ないてさかまはしおどつ  
れないがどぶじありこいどぶじやいな

三 月とさぬれをこゝろとくもる合わしが懸路は暗くやん  
○夏はらと涼みよとんせ洲さる町海面ふたゞよふ月影あ



四

うかねくして舞もふ舞も大い坐ひけてなはけもまわし  
都屋淨氣かたらふ寝やの戸をあけて別の后朝くやな  
みだもしめるそでがうらヨイくヨイヤサ

○色の名もいとぬくど山吹の合なびくといふもすらの  
中水よながすがわしや氣にかゝる何を魅かくとくど

はんぬ女子といふものとやるせまいものでござんすせ  
いの

○萩結梗もかに玉章しのばせて合月と野末に草の露合君  
をまつむし夜毎にすだく合ふけゆくかねよ鷹の聲戀は  
かうしたものかいな

五

○はんよ思へばさのふけふ合月日たつのもうわのとら入  
のとしりも世の義理もおもはぬ戀のみつせ川合達ぬ其  
日と氣にかゝるめへばくせづのたねとなるにくらしい  
はとかわいうてエ、せしが思ひは何じやいら

△月あかり見ればおほるあふねの中いきなつめびき水で  
うし思ひあふたる首尾の松

△つみやれれつみやれ宇治の里の茶つみ合廿あまりは替  
の花よ廿の人にホとかいて茶といふもしあよむいな

いよすをろして茶どつみやれ  
○月影にうつるすがたのえ、はくらしいなほろかけびん



かき撫ても思ひかうもやつる、合ものかいな

○辻うらや合松葉かんさし盛さん合戀といふ字よひか  
れて合ひとり雪の夜合しのんで来たに合とらが立かや  
わししやとてまたす心は合無しいな

○つれないと思ふは迄なほ合身にしみくと寝ぬ目てか  
いたあすの文合とも毛らしらと心もどふていつと長世  
お合なる氣おなつて逢ば男のくちくるま

○堤におびく青柳のむすんでどいて縁のいと引どめられ  
て見かへりのおもせふりな捨ことばはうらやな  
とやはんふ

○つくるひはなけれ迄どこか尾花草合露をふくめるしは  
らしさ月にひかりをますぬいさ

○春雨のとれておほろお月のさす合すいさ櫻の色よりも  
ほろ酔さめの仲の町一ぢふさはしき花の露

○春風に合ふさまわれし小蝶さへつがひはなれぬめう  
と中合那の葉にちぎる心ぬを風がじやまして合袖やた

もとの綾とある  
○春と長閑お梅屋しき合あつまの森のうらくも寝にむ

せる柳しまめかぬまがめしやないかいな  
○字てんがけの露のものとほりかへりておきしきやなか



つなこたえいぎなからもとやすにへこれぞ地さやうのき  
やりぶしおいやれよい〜〜よんやあ

○こかた沖おきから舟ふねこぎいだす ヤア 合トヤ もしも船中せんちゆうで雨な

せふらば ナント 合シヨ わしがあみだとさつしておくれ カツチケ子

腹はらのたつときヤ茶ちやわんでのみな 合のめのめぬ 合さけさけ

ならずけてもやろかいやあらすいさよなおかしやんせ

ツトそこらが口舌くせつのたねとなる

□かまくらのナア〜 ヤレ ナーヨ 御所ごしよのお庭にわで庄屋せうやさんの

サン庄屋せうやさんのむすめか酌しやくよでた「酌しやくふ出たさうなナ

ア〜ナアヨさかなよりもヨイ酒さけよりも庄屋せうやさんのむ

すうが目めふついた「目めよついたとナア〜ナアヨつれ

ていかんせそりやせこまでも女子おんなと他生たじまうのゑんしやも

の「ゑんしやものとしてナア〜ナアヨたどへ野のの末すまそ

りや山やまのおく賤しんが伏屋ふせやもいとやせぬ

□露つゆのひぬ間の朝顔あさがおよてらす日ひかげのつれなさはあはれ

ひとむら雨あめのはらく〜と降ふかし

□月つきの八日やつかはお薬師やくしさまよ 合やくくしまいりの下向げかうの道みちて

合ちらちと見みそりし大おほふり袖そでよ 合とふせ今宵こんやとしのばあ

やあらぬしのびそこねてもしあられ長ながい刀やいばでちよ

んきらりよとま〜よままよ〜



十

○我輩と雪の氷の目かけとや合心ひとつをふたすしに合  
みすぢよかけし三味せん糸も絞なす胸のうちこそゑも  
しとつに合ひらちせり

○わしが在所は京のいさかのかたはとり矢せや小原にう  
しひいて合柴打ばんにせかぎあたまへちよいとひのせて  
合黒木かわんせんかいな合栗かとしやんせんかいなエ  
、エ、くくくかわしやんせんかいな

○おち残る月の隈なる胸の中こがれわびたる時鳥たゝみ  
じ聲のうらみなさ風あもまるゝ若竹のかうもやつるゝ  
ものかいな

○ぬれの先から淨名たつ合すゝきは露を懸したふ合ふた  
りか中をいぢわるな風がじやまして合ちらちらと落ちて  
はづかし月の影

○おまへと一生くらすなら合深山のおくのわび住居ぬひ  
針しごと糸車合細さよ川て合布さらし柴かる手わざい  
ぬとやせ

○今あるとたしか上野か淺草か合あはふがらすかわらふ  
とまゝよ合かわい〜とひさしめて合わつ〜けさそふ

十一

雨の朝合すたの川風うわ氣をつれる露の苦舌のさめ心  
中なほりすりやわけのかね



○いらた子出じまの眞こもの中でちやめさくとはしはらし  
二十 やよいらちやく

○色でかよふふ合雪の夜みちをしよんほりとうらからま  
はつてどんくくく三ツのひやうしでたかかんせとん  
くくくいくら叩てもうちにはおるすかおなぶりか  
のさとふたりで寝てかいなかへりましよ待しやんせ

○伊せにうちはし内宮外宮は十末社のみやすめおすき  
お玉にあひのやまからしほさん紺さん花いろさん岩戸  
さんへと道つゞき二見かうらにはあさま山あふむ石い  
そへびぐよぬらたわくわくちんたれまうしやておほ

七

○因州いなばのとつとり川でしかも大道のまん中で娘が  
三人いであふて先ある娘が十六で中なる娘が十七であ  
とある娘が十八でさきなる娘がいふ事にヤとしめてど  
のさと寝たよたさとみつめさきりでもまるくやうさきりや  
くくといとささる中なる娘の云事にヤとしめてとのさ  
と寝たよさと朝くらざんしよをくふがやふあひりりや  
くくといとささるあとなる娘のいふ事ふやはじめてど  
のさと寝たよさは寝めしとろくそくふがやふにぬるり  
やぬるりとやふとんる



□いつれふる古年みし雪よわらねども鉢の木とゆふたら

十 ぬれぬれぬれし雨やとり松はもとより常盤津のしよ

う歌に花も櫻木にうめがかかりとしめやかあ夜もふけ

わたるふなとしのさのみ心にひすはぬ夢もちされ具足

のいとせめて身のさびをとかんとてあはやせ馬にうち

のりて故郷へひちをまたやりてあつまへいつかかへり

さんがの庄

□唐の錦祥女がろう門にかけあがりひざと鉄砲はあすな

よつともものどもや鹿相するあさんあやさんよやのとら

やアヤ

△かわい／＼となく虫よりもなかぬ螢が身をこがすなん

五十 のいんくわで實なき人にしんをあかしてア、くやし

○夜さくらや合うかれからすがまい／＼と合花の木かけ

にたれやらを待ていな合とほけさんすな芽ふき合柳の

合風あもまれて合エ、ふわりふわりとチサさうしやい

なはうじやわいな

△高砂やこの浦舟お帆を上て月もろともよ出しほの合な

みのあわたの島かげや合遠くある尾の沖すぎとや住

の江につきにけり合はや住の江よ着にけり

○れんりの藍の色かへぬときわのみさは若みどり千歳は



まろが真代もさかへて雪の朝日かげとけたすがたのた  
のもしや

①その陸のひと聲と合花川戸より鳴そめて土手を八聲や  
はとくさす

②月がさぬれば舟とちらく合あれはるしかにおくり舟  
シテまたナせほたなのろけをつめびきで合ついてくり

やるな八まんがねを合うたふてきたぞへエ合ゑい  
③色氣ないどて苦よせまいもの賤がふせ家又月かさす見

★十 やれとらおも合花が咲田うへもどりに袖つまひかれ今  
驚もよとの目づかひにまねもあいつのめむるよしすき

に残る露の玉しとよんたがひりかいな

十七 ④花のくもりか合遠山の雲か月かとしら雪のあかをそよ

くふく春風にうささろふやさぐ波の合此所は鷹も都

せりあふぎひやうしのさんざめくうちやゆかしくうち  
やゆかしさ

⑤綱は上意を繋りて羅城門へぞ来りける折しも雨風はげ

しきうしろより兜のしころをひつゝかみ引もとさんと  
あいとひく綱も聞へしつとものよてかのくせものよ両

手をかけ直ル△よしやればなしやれしころがされるし  
ころされるくだいとあいがたつたいまもふたひんの



毛がそんしるこく七ツすぎはゆかねばならぬそこ  
へゆかんすがこちや氣あかゝるたれじやくおまじや  
ないものわしじやものサツサかぶともしころもなつち  
もいらねへサツサもつてけしよつてけ

□香に迷ふ梅か斬端のにはひとり花あふせをまつとせ  
の明て嬉しきけさの文ひらく初音のしほらしくまだと  
けやらぬうす氷合雪に思ひは深草のもい夜も通ふ戀の  
やみ合君がすがたのかり寐の床まくらかたしき夜も

すがら

○花あなく驚水あすむかむちも思ひと同じあいたいの雲

九十

のまかさのいさり舟ながれしだい之風次第縁のかみよ  
つあかるゝ楫を枕よみあそとぞへ

○玉川の水にさらせし雪の肌合つもるくせつそのうち  
にとけし島田のもつれ髪合思ひ出さすあわすれすに又  
くる春をまつぞへ

○書送るふみもしどなきかな書やだいてねよどのかね言  
も合岩よせかれてちる浪の雪かみろれかみぞれか雪か  
どけて浪路の合二ツもト夫をこひしどしたふてくらす

○わかぬ浦は合名所がござる一にぞんけん合二あ玉つ



しま合三にさがり松四にしほこまや天のはし立されと  
のもんじゆ文城さんよけれとも切といふ字が氣に  
かゝるサツサなんとせうかどふせうぞいな

□たけになりたやしちくだけ合もとはしやく八中はふへ  
すへはそもトの筆の合ぢくおもひまいらせいしとそ  
れくそらトやへ

○秋の夜と長いものとはまんまるな月みぬ人の心かもふ  
けてまてともこぬ人のおとするものとかねばかりかそ

十二 うる指の寐つおきつわしやてらざれてゐるといな

□かな手本忠臣藏口上いゝがひよつと出る大序あくれば

十一

あしかゞたゝよし公お引そふてもろのう判官もゝの井  
かはよこかふとあらためる二段目松切は本藏けんもん  
袖の下にとや馬かけつける三段目にヤまくあきすん  
でさなきだみおもきがうへの小夜ころもわがつまなら  
でつまな重ねそとかほよがよんたで師直とらをたつは  
んくじんは夢おもごま梅かしらしぼり鮎といわれたの  
で眉けんをなやませる四段目はらきりすんで大ぼし城  
を明わたす五段目定九郎があゝいゝおやぢどの人た  
るへきものかん平ししとまちかへられて鉄砲二ツ玉し  
うとめと勘平かけよりくわい中さがせばしまの財布あ



五十兩をもつて逃る六段目よや狸のかく兵衛たねかし  
 まのめつばう彌八が興一兵衛ちよいと戸板にのせてつ  
 めたいおどげじやこさらぬとアさなほとけでこさるな  
 んぞとくやみもいわすよしやれかへるあどて深あみ笠  
 のさむらい二人とやの勘平むだばら切せてうたかいは  
 らしてのづらで立かへる七段目おやおかる上から見下  
 せば夜目遠めなり字せうもおほろよ思ひついたらるのべ  
 かゝみゑんの下には斧九太夫かなほゑつば八段目お道  
 行すんで九段目にや雪の降のよ山科からぬれしよぼた  
 れてつめたいかけがいのまいのに進上申とこむ借がそ

うとうす十段目天川屋き兵衛は男づく手うちといまふ  
 てとば切そふめんしこたまくらつてあとで命のないの  
 にいさんでつゝ立たわけ十一段目すみべやまつくる黒  
 てたちしゆびよくかたきうつまつ今日とこれぎりて打  
 おさめうかれくしておもしろや

浮名たてどもまだそひもせず籠のうぐひす庭のむめ  
 雪の明りに垣根へしのびうちの首尾をばさぐり梅  
 戀のみちしは岩うちかけてほんにわたしは親しらす  
 棕の葉こしよさす月かけでぬしを磨てみるこゝろ  
 何と盤瀬のわしやさら鳥紗さばさかねたるものおもひ



程もよしずの待合茶やですかしりましたとそばへよる  
人に言はれずこゝろの團扇わたしや好だよ此似顔  
あじを處ろあたまりし水を來てととんぼの尾でこねる  
ぬしあけたるそばこのからもつゝやあどなき朝の星  
けぬき合せに立さるゑにし思ひかへしもなみ羽あり  
こがれくつてまつ夜を明しけさあしたの物思ひ  
トつと抱しめしばしが程とないてすゞしき松の蟬  
淺さちざりと言はんすけれどなれりや味よき一夜鮓  
横におなりよおまへの耳ようそのしゆみこむ垢がある  
眞事あかせと耳にも入らずはんに短氣あさじの聲

か愛御方といわれておくれ惜いはかりが程じやない  
ものや思ふと問れてほろりおとすあみたの雨やさめ  
かあいがられてだかれさまりもほんどけられてふくれづ  
ら  
月に見とれてついうかくとけつまづいたが縁のはし  
はつて置れて實なる私ぬしは浮氣な歸り咲  
怪我お切るとは言ひなんすなへたとひうそでも腹がたつ  
ならふ事ならかななでそつとたちしうき名がけづりたい  
わまた言はふと思ふた不足みんなわすれてうれし泣  
うつす鏡のこゝろの内のもつれさはひた楠のむね



末を思ふて唯うつ／＼とはんあふけたよ小夜砵

すいが懸路のみちしるべしてやみをうばふた梅月夜

千代もかはらぬうれしい文を松葉かさしで切た封

下駄の花緒とされても儘よされぬこゝろののちはだし

こがれ／＼て待身としらで風のたより玉すだれ

人にそむかぬほどよい顔も雲かへだてし春の月

くせつし遇てぬる事さへも意氣とはり子の起上り

ふかいごゑんど一度でわかれこゝろのこせし二つぼし

ひねのつまりお吹出すはこゆくゑわからぬ物思ひ

男ひでりのあき身の上と思ふやなみだの天が下

かへす衣のうらから夢がぬけてかさしま泊る蝶

あつい情はとすれぬ今宵ぬれて色ます水うちは

耻をさらしのふとんの上よひとりてれたる夏の月

月おやてらされ雨おとふかれやつれ／＼し枯尾花

ほれた盃けい馬お飛ばしちよつと玉手とめでしらす

手出したなされにやこの袖口も切れる苦勞とせぬものを

させる片手にたゝみをたゝさくちにてぬぐひしぱり

たまのあふせのうれしい床あまたもふとんに入る笑くば

あふによしどのよい辻うらもならぬまくらと又も愚痴

ひねの板屋をもれ出る雨は不敵にしられたため涙



去年の氷も只ひと夜さにとけてるの日は玉の春

丸い心よりんきのつもの出るも見たしのかたつむり

夢のわかれをひきとゞめしと思ふや手も持つ夜着の袖

積る思ひのとけないうちはゆくおゆかれぬ雪のみち

すいな風じやとあたりをつけてゆくもしばしの橋すゞみ

ひとり寐る夜はよし鶏もかけかねもたゞなれ恨みやせん

おもひ小がれの一くしさかなすへのちぎりをかため魚

かはす枕のつもりがちがひひとり浮ねの濱ちどり

されたころもけさほら玉のころもみれんお残る雪

人目あるもへすけなふみせてひとりしあんの口こもり

のりのこわさにうつ小夜碓うらをかへせばしんなもと

おつな事からもと木がかわりへんおつき木お花が咲

つまと身布のそのゑは縫に逢ふもうれしきちから糸

秋が来たかと思たしの胸にぐつとさしこむ窓の月

しける懸路の木の下やみと月ももらさぬ中となる

人のそしりにはや氣がまはりつけてくらうのふくみがね

花よいろかのないものなれば人おあられる苦はやまぬ

見かへされてはゑり取手をし日傘かたげて見る笑がほ

いやな辻うらとしや玉川のきぬたうつ手も合ぬ胸

人めあるゆへひきさく文もちよつと名前とよけてそく



ふけて遠ねふきこもるつゞみひとりまつ身の耳よたつ  
陰にいたもの一寸つき出され月を見そめし庭の松  
仇あわらしが夜るふく故にあすといわれぬ戀の花

言へばりんきと小袖のしはもむねふたゝんでないじやく

日かすたゝすにはやはれこんで深ふなつたよ庭の井戸

追へどとらへどゆめにも覺ぬはなに胡蝶のうかれ魂

且しが思ふはこの座にひとりお名はさゝねと目でしらす

ねがひかゝふて逢夜の床に神がすねよといふかいさ

逢ふたうへにもまたわひたらぬとんとかぎりのないほころ

こゝろこめにしわの初かりもねくらたづねる一ツ文ト

いのち捨ねばとゞかぬおもひきつたゆびさへうたがわれ

わとにやひとよを千代とも思ふまつは久しいものにして

今とわなたのさび小刀もじせつまたんせといで見しよ

花の下ひもこのとるさめよとくかとかぬお吹あらし

思ひ切戸おもつれし柳つゆのいのちのときほどき

やはなの方ど聞やはらか立しかしその方が夜のねよさ

最はやかふなりやせつたい絶命ぎりもへちまも水にする

ぬしとまつ夜は月よりほかにたれもいれないかやの内

月おだまされとひさし鳥なけをあけない軒の下



V-12

明治廿七年七月十二日印刷  
全 年全月三十二日發行

大阪市南區瓦屋町一番丁  
五十七番屋敷

著作兼  
發行者

三木直吉

大阪市東區南農人町壹丁目  
四十一番屋敷(本來堂)

印刷者

清水修藏

大阪市松屋町通九之助橋南入

發賣所

三木直入堂





3  
2